



南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標
われら皆 和解の器
平和の担い手

〒902-0067 那覇市安里3-7-2
カトリック那覇教区本部
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
発行人 W.F.バートン司教 1部40円
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2023年10月1日 (毎月1日発行) カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ 第779号 (10月号)

ロザリオの月

神の子の神秘を心のうちに黙想しつづ

十月はロザリオの月です。

「ロザリオ」という名はロザリオの数を意味します。ロザリオの鎖の基本となる部分は、一つの単独の珠と十個の連続した珠で構成された「連」が五つつながって一つの環になっています。「二連」は十回の「アヴェ・マリアの祈り」の頭に「主の祈り」を付け、結びに「栄唱」を付けたものです。これを五回くりかえして「一環」となります。ロザリオの「連」のことを、英語では decade と言いますが、これは十個を意味するラテン語に由来する語です。

ロザリオの祈りは「アヴェ・マリアの祈り」を十回唱えることを基本にした信心業であり、心と体、祈りと黙想を一体化し、しかも、老若男女を問わず、また健康な人はもちろんのこと、病気で床に伏していても、電車や自動車の中、状況によっては仕事中でもできる信心業です。聖母マリアを通して、キリストの救いの業を黙想し、聖母に取次ぎを願う祈りです。

の準備のためです。最初の十字架で「使徒信条」を唱え、次の珠で「主の祈り」、三個続いた珠で「アヴェ・マリアの祈り」を三回唱え、結びとして「栄唱」を唱えます。もう一個の珠は環から外れていますが、この珠がロザリオ本体の最初の主の祈りのためです。



ロザリオの神秘(「奥義」または「玄義」とも呼ぶ)は、「喜びの神秘」・「苦しみの神秘」・「栄えの神秘」(日・水・「光の神秘」(木)のようになっています。教会は歴代の教皇様たちの口を通してロザリオの優れた面について述べてきました。ロザリオは大量のための「教会の祈り」と呼ばれており、全福音の主要、神の子の神秘を中心に置いた祈りであり、マリアに対する連願の形をとった「アヴェ・マリアの祈り」の唱えは、キリストに対する適切

には五連の環になった部分に、十字架と単独の珠と三連の珠に加え、もう一個の単独の珠のついた鎖が三又の金具によって繋がっています。環に取り付けられた十字架のついた鎖の部分、ロザリオの祈り

の神秘」・「光の神秘」の四環で成り立ち、それぞれに五連ずつ黙想のテーマ(神秘)と祈りの意向が定められています。全四環、二十連となります。修道会などでは一日に全四環を唱えるところもあるようですが、一般信徒のためには曜日ごとに黙想

する神秘を割り当てて、一日一環を唱えるよう勧められています。「喜びの神秘」(月・土)・「苦しみの神秘」(火・金)・「栄えの神秘」(日・水)のようになっています。

ロザリオの月を通して、ロザリオの祈りに親しむ習慣を身につけていくことができます。

れることのない賛美であると教えられています。さらに、心静かに潜心して行われれば、キリストに最も近い方聖母マリアの目を通して主キリストの生涯を黙想し、また、黙想することもできると教えています。

ロザリオは誰でもすぐ祈ることのできる単純化された祈りでありながら、信仰の真髄に深く入り込むことのできる祈りです。心も体も一体となつて、キリストの生涯に思いを馳せ、その道行きを一緒に祈りながら辿る、大切にしたい信心業です。一枚一枚のバラの花びらになぞらえて「アヴェ・マリアの祈り」を繰り返して唱えることは単純な動作ではありませんが、単純であるがゆえに、唱えながら私たちは潜心し、自分の信仰とその理解を深め、自分の生活と結びつけて祈ることができるのです。



On the Feast day of San Lorenzo Ruiz Patron Saint of Yomitan Catholic Church on Sept. 24, 2023

by: Fr. Ricardo Bugas Jr., MSP

The Yomitan Catholic Church celebrated its 17th feast day of St. Lorenzo Ruiz de Manila. This yearly celebration is to honor our saint for his dedication and fidelity to Jesus Christ. It is also to express our gratitude to God for the inspiration and his intercession of the many answered prayers of our community. His Martyrdom was the ultimate offering of himself, a selfless giving of his life as a witness to the gospel. His courage in the midst of persecution was worth emulating.

Faith received, Life offered: Martyrdom as a gift

Not all of us are called to walk into the road of Martyrdom. It is a gift from God. "Before I formed you in the womb I knew you." (Jer. 1:15) St. Lorenzo Ruiz responded to that gift "if I have a thousand lives, I will offer it to the Lord." This is an inspiration that assures us of a life from God. "If God is with us, who can be against us?" (Romans 8:31).

Christianity flourished because of the witnessing of the saints and martyrs, who lived exemplary lives. They became the inspiration of the many who really need a resolute faith to hold on to the end. "It is by losing one's life in Jesus' name that we become a life to others" (Mt.10:39). St. Lorenzo by the grace of God had fully understood the purpose of his life, the vocation that he had to respond to. The gift of martyrdom that he embraced.

Hope in the midst uncertainty

We are living in a world full of anxieties. We have so many concerns to address in our day to day lives. We are so stressed with what's going on around us... i.e. the uncertainty of our future. Confronted with these challenging modes of the time, we begin to question our journey. However, we should never lose sight of the goal that we want to reach and settle. Where shall we go...? St. Paul said "I consider that our present sufferings are not worth comparing with the glory which shall be revealed in us." (Rom. 8:18). St. Lorenzo Ruiz had a deeper understanding of his suffering. He embraced Jesus in the midst of persecution that consequently led to his death. The glory of the Cross truly outweighs the despair of fear. He raises hope by turning tears into joy.

"St. Lorenzo Ruiz de Manila, pray for us, that we may have the courage to stand for our faith. That we may see the glory of God in our pains and sufferings, that life is worth living even if it faces difficulties and uncertainties. That our community will grow in faith and be the ray of hope to those who walk in the tunnel of darkness. That our lives will truly serve as the vessel of reconciliation and Peace for our brothers and sisters."

Happy Fiesta to all! We are grateful for the presence of our beloved Bishop Wayne Francis Berndt, O.F.M. Cap for officiating the Mass. To our visitors from the Philippine Consulate in Osaka, Consul General Atty. Voltaire Mauricio, his family and staff, to our friends and benefactors who shared their blessings for this celebration, to all the volunteers who offered their time and talents, your presence ripples an unparalleled delight to this celebration.



沖繩に移住し、今年で四年目を迎えました。長崎で生まれ、結婚と同時に夫の住む大阪に引っ越して、長女が生まれました。その後、夫の両親との同居のため枚方市（ひらかたし）へ移り、その地で次女が授かりました。それから三重県に家を建て引っ越して十年後、私の親の介護のために夫と共に長崎へ戻り、祖母や母を看取った後、どうしても住みだかた沖繩へ移住して参りました。

たて軸よこ軸

神に感謝して生きる今日

具志川教会 國松 成美

わたった道のでした。生活の場所が変わると、楽しみも多くなりありますが、馴れるまでの気苦労も数多くあったことは確かです。しかし、どの土地でも、心に残る思い出が、たくさん出来ました。

私は幼児児礼で、長崎という土地柄もあり、信仰生活はかなり厳しかったと思います。いっしょに祖父母も生活しておりましたので、家族皆で集まり唱えた朝夕の祈り、毎週日曜日の礼拝、公教要理の勉強等々、サボりでもしたら「ご飯は抜き」と厳しく言われたものです。

私が十歳の時、父が事故で亡くなり、その時母は三十三歳でした。が、祖父母もいっしょに暮らしていたお蔭で、兄や妹と共に辛い思いをして育つたという記憶はあまりありません。ただ改めて思い返しますと、きつと母や祖父母が私達に淋しい思い悲しい思いをさせないよう心配りをしてくれたお陰なのかもしれません。我が家は特別に裕福でもありませんでしたので、母や祖父母も何かと気苦労も多く、大変な生活だったと思います。

現在私は、介護の仕事をしてます。資格を取ったのは、五十歳の時。長崎に戻って母や祖母の介護をする際に、何かの助けになるかもと思つて取得しました。この世に生を受け、特に横道に逸れることもなく成長出来たのは、母や祖母のお陰だと日頃から感じておりましたので、良い恩返ししチャンスだと思ひました。しかし日が経つにつれ、仕事としての介護の方が、次第にメインになっていったので、よく母から「誰の介護のために長崎に戻ってきたの？」と嫌味を言われ、心が痛みました。

沖繩は、観光では何度か来ていました。殆ど土地勘もなく、知り合いもなかったのですが「沖繩に住んでみたい」という思いが次第に強くなつていきました。移住を決めてまず伺ったのはカトリック具志川教会でした。平日だったのでお会いできたのは私服姿のサニー神父様でした。（神父様だったというのは、正式に移住してご挨拶に行つた時に分かつた事です）。最初の神父様の言葉は、「いつでも来て下さいね。待つてますよ」という温かいお言葉でした。知らない土地で多少不安もあった私達でしたが、神父様の笑顔に本当に救われ、安心して帰路に着いたのを今でもしっかり覚えています。

移住後、初めて出席したごミサでも、サニー神父様はじめ高江洲会長、信者の皆様が、本当に温かい言葉と笑顔で私達を迎えて下さいました。

現在も礼拝出来る日曜日だけで、教会内外の掃除も色々な教会活動も、殆ど参加出来て無い私達ですが、それでも何も文句を言われる事なく、顔を合わせる「おはよう、元気にしてますか」教会に礼拝してくれてありがとう」等、誰もが言葉をかけて下さいます。

私達にも、声を掛けて下さる知り合いが出来たことは、こんなにも心強いものかと本当に嬉しく感謝の日々です。

ノートルダム清心学園理事長だった亡きシスター渡辺和子先生の著書に「置かれた場所で咲きなさい」という本がありますが、その中に「時間の使い方は、そのまますの使い方なのです。置かれた所で咲いて下さい。結婚しても就職しても子育てしても、こんなはずじゃなかったと思う事が出てきません。そんな時にもその状況の中で咲く努力をしてほしい。どうしても咲けない時は、無理に咲かないで根を下へ下へと降ろして根を張るのです。次に咲く花がより大きく美しいものとなるために」の教えがあります。

どんな場所に居ようと、どんな環境に置かれようと、神はいつも周囲の方々を通して、私を助け守つて下さっている事を、今日も実感しています。神に感謝。



**大阪高松大司教区設立式と
トマス・アキナス前田万葉新大司教着座式**

日時: 2023年10月9日(月・スポーツの日) 13:00~
場所: 大阪カテドラル聖マリア大聖堂
〒540-0004 大阪府大阪市中央区玉造 2-24-22

- 大阪高松大司教区の司教座聖堂は、
大阪カテドラル聖マリア大聖堂
- 新しい事務局の所在地は、大司教館のある玉造。

那覇教区平和委員会

日時: 10月22日(日) 14:00~16:00
場所: 安里カトリック教会
講師: ウェイン・バートン司教
演題: **わが心の軌跡**~激動の1960年代を生きて~

カトリック那覇教区平和委員会
問い合わせ ☎090-1949-6569 (稲福)

2023年9月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時: 2023年9月5日(火) 10:00~12:20

会議の前に、マキシム神父の司式でベネディクションが行われた。

1 報告及び連絡事項

- ① 前回(7月会議)の報告を津波古が行い、承認された。
- ② 司教・司祭の休暇や研修などによる不在が連絡された。
フランシス神父、8月7日~9月7日
ヨアキム神父、8月31日~9月27日
ブイ神父、9月4~6日 全国典礼担当者会議(軽井沢)
ウェイン司教、9月20~21日 正義と平和協議会(潮見)
- ③ サマーキャンプについて、ブイ神父からの報告書をもとにウェイン司教から報告と反省点について意見が述べられた。昨年に引き続きデイキャンプとなったが、担当者の急な交代や台風による延期などの予期せぬ困難を乗り越えて、無事に開催できたことは、大変素晴らしいことだった。これは多くの方々の協力によるところが大きかったと評し、感謝の意が伝えられた。ただし、反省すべき点も指摘された。W.Y.Dの意義にもあるように若者同士の出会いは、代えがたい信仰体験をもたらす。そうした重要性を考えて、すべての主任司祭が自分の小教区の子供たちを、尋ね捜してでもキャンプに送って欲しいと強く求められた。その他の意見や反省点を踏まえ、次回に活かしてゆくことを確認した。
- ④ カテキスタ養成講座について、担当のピーター・チェ神父から報告がなされた。全小教区から、総数44名の受講者が参加し、始めに安里教会聖堂にて、開講に際してのミサがウェイン司教司式によって捧げられ、参加者に特別な祝福が与えられた。その後ホールに移動して『聖書』をテーマにマキシム神父による第一回目の講話が行われた。すべての小教区から参加者を得ることができたことは素晴らしいが、今後少なくとも二年、24回以上の講座が予定されており、養成講座の継続性と深まりが求められている。引き続き霊的、精神的、知的な支援が教区全体に求められた。また、聞き手には哲学や神学の基礎知識がないことを前提に、ゆっくり丁寧にせつめすること。さらに学んだことを深めるために、受講者同士の分かち合いの時間も取るよう要望が出された。こうした時間の使い方をするとすると2年間と限定せず実施してゆく必要があることもあわせて指摘された。
- ⑤ ワールドユースデイリスボン大会について、参加した小川綺袈さん(安里教会所属)を招いて感想を交えての報告となった。『全世界から集った若者の大会は素晴らしい体験となり、特に教皇様の「ありのままのあなたを神は愛しておられる。だからありのままの美しいあなたを生きてください。」とのメッセージが心に残っていること。また、特に日本から一緒に参加した者同士のつながりや、沖縄の4人のメンバー同士のつながりも大切に、これからこの体験を多くの人に分かち合いたい。』との決意が述べられ、その感動を分かち合った。ナビーン神父からは特に派遣費造成寄付協力に対する感謝が述べられ、津波古からその収支報告がなされた。派遣費用を遥かに上回る寄付金が寄せられたため、次回の韓国ソウル大会への参加費用に充てることが提案され、全会一致で承認された。
- ⑥ カリタス那覇のボランティア人材データベース登録募集活動について、担当のマーシーさんから報告がなされた。7月9日にカトリック文化センターで説明会を行い、今後様々な場面で想定される活動の場で、多様なボランティア人材として活動することを確認し合い、カリタス那覇の活動方針について学んだ。14人の参加登録者は、今後の環境課題への取り組みや炊き出し、困窮家庭への支援活動などを神の愛のこころで取り組んでゆく決意を新たにした。
- ⑦ その他
 - ・長崎教会管区の司祭養成システムの変更について、ウェイン司教とマイケル神父から報告がなされた。福岡にある福岡カトリック神学院とそこに併設された福岡コレジオは、いずれも在籍者の激減により、養成課程に重要な共同体生活の形成が困難となり、今年度末をもって閉鎖することが決定した。現在在籍する神学生は、東京カトリック神学院に転籍して養成を継続し、コレジオの学生は所属する教区にて大神学院への準備をすることとなった。長崎教区は、引き続き小神学校を維持運営し、必要に応じて大神学院への準備過程であるコレジオについても同教区で賄うとしている。今後、もし那覇教区から小神学生希望者やコレジオ希望者が出た場合は、長崎教区で受け入れてくれることを確認していることが報告された。
 - ・教皇フランシスコにより、8月15日付で大阪大司教区と高松司教区が合併して新たに「大阪高松大司教区」が設立されたことが報告された。10月9日にトマス・アクィナス前田万葉新大司教の着座をもって新たな大司教区が始動する。
 - ・「2023年すべてのいのちを守るための月間」について『ラウダート・シ』デスクの責任司教談話『正義と平

和を大河のように』が読み上げられ、その意義を再確認した。9月中にこのテーマを取り上げ、ミサやその他の典礼等に反映し、世界中の教会と協調して、靈的にも活動としてもその精神を生きることができるよう各司祭・助祭の協力が求められた。

- ・安里教会のガジュマルについて報告がなされた。前回の会議で決定された通り、今回は教区の負担で、保育園側の根伐りとコンクリート敷設による根被害の除去工事と同時に、園と反対側への根の誘導施肥術を樹木医により実施したことが報告された。今後新たな根による被害が生じた場合は、三者協議の上、保育園と安里教会で対応することも合わせて確認された。

2 審議事項

- ①台風被害について、ウェイン司教と津波古さんから説明と要請がなされた。那覇教区内のほぼすべての関連施設が加入しているカリス火災共済は風災にも対応しているため、台風などによる建物に対する被害は、必ず報告するように要請がなされた。5万円もしくは20万円を超える被害については、その超過した額の保険金が支払われる契約となっていることから、どのような被害であっても、自己判断せずに被害状況の写真を撮り、被害額の見積りを取って報告するよう強く求められた。
- ②司教予定について、マーシーさんから説明がなされた。9月16日～17日；保良教会と平良教会（宮古島）、9月24日；読谷教会公式訪問、10月1日；小禄教会公式訪問。
- ③各種の請求金等への対応について、ウェイン司教と津波古さんから注意が促された。教区本部を通じて中央協議会等に送金すべき特別献金は、指定日の献金を教会会計に計上することなくそのまま速やかに送金すべきこと。また、自動車税や自動車保険料、火災保険料、分担金および『南の光明』誌への購読料など、多くの請求書が各小教区等へ送られているが、最近こうしたことに対する対応の遅れや、支払いが無かったりするケースが増加している。こうした請求書などが、必ず信徒代表や会計担当者にも届くよう、信徒代表と会計担当者のメールアドレスと連絡先を教区本部に通知し、今後は事務手続きが滞ら無いよう対策をとることが通達された。そして、速やかにマーシーさんにこれらの連絡先を通知するよう依頼がなされた。
- ④召命に関する募集ポスターについて、召命担当のマイケル神父から説明がなされ、意見が交わされた。準備されたポスター図案が提示され、その内容等が異議なく承認された。しかし、ポスター掲示だけでは、召命活動としては不十分であるとの意見が出され、すでにそれぞれの小教区でなされている祈り等をさらに発展、強化するためにこの図案を用いて召命のための祈りのカードを作り、靈的支援に活用することが提案され、承認された。祈りの文言については、マイケル神父と司教に、カード作成はマイケル神父に一任された。
- ⑤時間の都合上、石垣教会での司祭・助祭拡大会議実施については、ウェイン司教とロドニー神父に一任することとした。
- ⑥典礼について、ウェイン司教から注意がなされた。いくつかの小教区から典礼についての疑義や不満が寄せられていることが伝えられ、今一度典礼法規に則った基本姿勢が確認された。
 - 1) 典礼における役割分担の遵守；司祭が一人でなんでも行ってはいけない。
 - 2) 典礼の統一性の遵守；司祭の個人的な考えや感性でもって、典礼規則で許されていない変更を加えてはいけない。
 - 3) 典礼の共同体性の遵守；神の民の祭儀としての性質上、許容範囲内であっても信者との相談し、可能な限り参列者の納得を得て実施する。以上のような理由から、今後は可能な限り小教区でも教区レベルでも、チームでもって協力して典礼に取り組んでいただきたい。
- ⑦その他
 - ・『南の光明』誌の運営については、様々な困難を抱えているが、単なる広報誌ではなく情報提供する側も情報を受け取る側も、この媒体を通して靈的成長に役立つことが重要である。そのような紙面であるために、特に司祭団の積極的な協力を願いたい。購読料送金に関しても原稿の提出に関してもさらにスムーズで積極的な対応をお願いしたい。
 - ・稲国神父様の近況について、長崎の滞在場所を訪問した藤澤神父から報告がなされた。至って元気な様子で週日は毎日デイサービスに通い、かわらず楽しく過ごしていることが伝えられた。

次回10月の拡大司祭・助祭会議は10月3日(火)午前10時から安里教区センターで行われる。

カテキスタ養成講座 始まる

ピーター・チェ神父

以前から強く望まれていながら、いろいろな事情で延期となっていた「教区カテキスタ養成講座」が、去る7月から開講された。終戦直後の1947年、2人の神父の来島によって、沖縄での本格的なカトリックの宣教活動が始められ、その後、多くのカプチン会神父が来島した。彼らをサポートする数名の伝道師・伝道婦の働きは大きく、信者は着実に増え、最盛期には六千余人にもなった。ところが近年ではどの小教区でも信者数は減少し高齢化傾向にある。戦後の物のない時代には物心両面の救いを求めて教会に来る人が多かったが、物質的に豊かになった現代では教会は不要になったのであろうか。否、そうではない。物質的には満たされたが、精神面ではむしろ以前より殺伐とした状況にあるのではと思われる。目まぐるしく変化し混迷する世の中についていけず疎外感を感じる人、精神的に病んでしまう人も多く、新興宗教に救いを求めたり、自死、あるいは無差別殺人事件を起こしたりもする。精神的な救いを求める人の多い今だからこそ、唯一不変のキリストの愛を証しする必要がある。

「あなたがたは行って多くの人を私の弟子にせよ」(マタイ二八・19-20)、
「刈り入れは多いが働く人は少ない」(マタイ九・37) という聖句が胸を刺す。

ところで現在、那覇教区は邦人神父が少なく、他はベトナム、フィリッピン、インドの神父で日本語は話せるものの必ずしも流暢とは言えない。また、生活習慣や文化の違いもあり戸惑うことも多々ある。そのような神父たちをサポートしたりアドバイスしたりする役を是非信者にやってもらいたいと思う。ここにカテキスタが必要になる。

また宣教活動は神父だけの仕事ではなく自分自身もやらねばと思っている信者も多いだろう。個々の信者がカトリック教会の素晴らしさ、信仰の素晴らしさを自信と勇気をもって家族に友人に地域社会に伝えていくためにも、教理の再学習が必要だと考える。多くの信者が自信と勇気をもって社会に漕ぎ出すことで、各小教区はもっと活気に満ちたものになるだろう。

今回の講座の受講生の中から、カテキスタ、終身助祭が誕生することを願ってやまない。

同講座には、教区の募集に応じて、各小教区から44人の志願者が集い、7月15日午後、安里教会で開講式が行われた。今後は、毎月第2日曜日、午後2時から4時まで、同教会で開かれる。

カテキスタ養成講座の担当者

1. カトリックの教え: シスター仲大底、デニス神父、フランシス神父、マイケル神父、ピーター神父、クレーバー神父、藤澤幾義神父、ブイ神父、シスター宮城、新垣助祭
2. 司牧神学: ウェイン司教
3. 聖書学: マキシム神父、マイケル神父、石垣助祭
4. 教会学: ボスコ神父
5. 典礼学: ブイ神父
6. 基礎神学: 古川神父
7. 倫理学: ピーター神父
8. 心理学: ウェイン司教
9. 福音宣教神学: 押川司教



声 角笛

ラサール師を偲ぶ
豪放磊落・社会派の木鐸司祭

安里教会
ビンセンチョ・ア・パウロ 松本 淳

ラサール師がこの世を去って早二年。とても存在感の大きい神父だった。訃報を聞いて駆けつけた通夜のときの安らかなお顔、そのお顔が葬儀ミサで遺影となっていたのを見て、ご逝去が現実のものだと悟ったのであった。いま静かに回想の糸を手繰り寄せるとさまざまに思い出が蘇ってくる。

学生のころ、琉球大学でカトリック研究クラブに入って宗教やら哲学やらを少し覗いてみた。学生生活の大半をコレジオ(当時)で過ごした。だから、当時学寮の指導司祭だったラサール師とは接触が多く、むしろ一挙手一投足を注視したわけではないが、師の息遣いが感ぜられるほど物理的、心理的に近い距離にいたと言える。

学生時代のこと、ラサール師のお声がけで、首里厚生園(老

人福祉施設)へ慰問活動をしたことがある。私のほかに二人の学生仲間が同行した。目当ての部屋に入るなり

神父特有の「ハイサーイ」の合図。響く大きな声にベッドから起き上がった彼女は、明るい笑顔と上品な標準語で「お待ちしていました」と丁寧に対応してくれた。

老女の部屋には他室からも二人、三人参加するのが常だった。聖書朗読は私がやり、次いで後輩の友人(比嘉正男氏)が得意のウチナーグチに翻訳する、という具合に進めた。集いの始めと終わりの挨拶は司会役のラサール師が務められた。

数年ほど続いたこのボランティア活動は、各人の就職に伴い自然と終わることとなったのであるが、若きラサール師自身(当時は三十歳頃か)の社会活動の萌芽期と言えるだろうか。その後のラサール師は、慰霊の日の魂魄の塔への「平和巡礼」や那覇教区の「カトリック正義と平和委員会」をリードする傍ら、国際アムネスティ沖縄代表を務め、また沖縄の基地問題を訴えるため、オバマ米大統領へハガキを送る運動なども主導された。他にも沖縄人権協会理事や沖縄憲法普及協議会理事にも名を連

ね、積極的に世の中を良くする社会活動に取り組まれた。

一方、司牧面では「生と死と老いをみつめる会」を主宰されるなど、信徒の信仰生活の質を高める活動にも力を注がれた。同会は、信者に限定せず誰でも入会でき、フリートーキングを基本としたユニークな集まりであった。

私も参加して刺激を受け多くのことを学ばせていただいた。とりわけ他宗教との対話を目的に企画された興禅寺の崎山崇源老師とのユーモア対談は、掛け合いにも似て大変面白かった。和尚さん（崇源老師）と自称ウランダー坊主（ラサール師）は、それぞれの主宰する集まりで互いに講師を務め合うほどとても仲が良かった。

晩年は体調を崩して、名護市屋部の介護老人保健施設（あけみおの里）で余生を過ごしておられた。亡くなる一年ほど前だったか、コロナ禍が猛威を振り出す前、お見舞いを兼ねてご機嫌伺いに行った。私を見るとすぐに分かってくださった。血色は良く、車椅子に乗っていないけれど、病人とは思えないほど元氣そうに見えた。しかし耳が少し遠くなっているとはいえず、同じことを何遍もお聞きになったことからすると、もしかして認知

症を患っておられたのかもしれない。

思えば、私たちの五十五年前の婚姻ミサの司式もラサール師だった。長いお付き合いの親しさの中で、いつか来る私の葬儀ミサの司式もお願いしたら、「はい、分かりました」と快諾すかさず「誰が先に逝くかわからんよ、ワツハツハツ！」と高笑いのお返し。忘れられない思い出の一コマだ。

没後二年経ったが、葬儀の際に頂いた写真付きのメモリーカードを見ていると、今にも「ハイ、ジュン」と親しく呼びかけてきそうな感じがする。泡盛もお好きだった師は、アルコールが入ると一層陽気になり、独特のラサール師で雰囲気を盛り上げた。人々を愛し、平和のために働く人と共に働き、世の中の不条理を糾すため政治にも深い関心を持ち、実に行動的な社会派司祭・よき牧者だった。

一九五八年に米国から来沖され、宣教活動は六十三年に及んだ。すっかり沖縄に土着化し、生涯を沖縄に捧げ、尊い使命を果たして天国へ召された偉大な宣教者・ラサール師。その出会の恵みと導きに改めて深い敬意と感謝の気持ちを届けたい。（イッペー、ニフェーデーピタン）
ありがとつございました。

私達の初めての御聖堂

—— 旧御聖堂に思いを馳せる —— 開南教会 伊田 初枝

私は昭和9年生まれ（89才）で、那覇高校1年生の時に初めて開南教会へ行き、1951年11月に洗礼を受けました。当時は、多くの那覇高校の生徒たちが学校帰りに教会へ集まって、有馬信茂伝道師から公教要理を教えてもらいました。アメリカから来られた若い神父様は、日本語は少ししか話されませんでしたが、笑顔とジェスチャーが老役男女の信者、特に若い女性の憧れの的でした。1952年（昭和26年）12月に、コンクリート2階建ての新聖堂が「聖マリアの汚れなき御心」に捧げられ、落成しました。一階は公教要理室、図書室、売店、伝道師宿舎と洋裁教室、そして、2階は総畳間の御聖堂でした。その年の12月25日、クリスマスの深夜ミサが新聖堂で捧げられた最初のミサでした。それから28年間、司教座聖堂として大きな役割を果たしました。1979年（昭和54年）5月に新たな御聖堂が「平和の殿堂」として落成し、旧聖堂は愛児幼稚園の体育室として活用されることになりました。

今年になって私達は、旧聖堂が取り壊され駐車場になると突然知らされ、大変驚きました。平日は、愛児幼稚園の子供たちの体操をする元気な声が、コロナ禍でも、道行く周囲の人々に癒しを与えていました。いつまでも在ると思っていた大きな十字架を正面に向けて、凜として建っていた旧聖堂は、7月になって姿を消してしまいました。

今は昔、思い出は尽きることはありません。多くの信者が公教要理を学び、洗礼を受けた御聖堂、教会の本や御像・ロザリオ等を買って求めた売店、洋裁教室で学び、自立していった女性たち。冠婚葬祭に関わった多くの信者の方々も、それぞれに思い出が蘇ってきたことでしょう。御聖堂で、レイ司教様がオルガンを伴奏してラテン語の聖歌を一生懸命に教えてください、とても楽しかったです。私達は御聖堂が出来上がったことで、祈りの素晴らしい場所が与えられ、大きな喜びで満たされ、幸せでした。学校帰りに、一目散に教会へ直行し、夕の祈りに与りました。「夕の祈り」に引き続き、ロザリオの祈りが始まるのが習慣でした。学校帰りの疲れとお腹もだんだんと空いてきて、大抵、半分は寝てしまっていました。

日曜日のミサは、広い畳間の明るい御聖堂が、大勢の信者や求道者でいつもいっぱいでした。年少の子供達も多く、大人のように1時間も静かに座っていることはできず、時間がたつにつれて動き回り、静かにさせるのが大変でした。私達にとって、教会に行くと友だちができておしゃべりをしたり、一緒にミサに与ったりするのが楽しい時代でした。当時の友人からシスターになった方もおられます。

旧聖堂の後半の大きな思い出は、1976年（昭和51年）に、新たな御聖堂「平和の殿堂」を信者が一丸となって建設するため、毎年大規模なバザーを開催したことです。旧聖堂は、バザーの食品の一大煮炊き場となりました。愛児幼稚園の保護者もバザーの食品づくりや洗い物、テント設営にも協力しました。みんな大変だった！けど楽しい思い出になりました。「聖マリアの汚れなき御心」に捧げられた御聖堂の思い出は、私も年を取り、記憶が薄らいだところも少しありますが、人生89年、思い起こせばいろいろな事がありました。

それでも、信仰の恵みのおかげで、感謝の思いでいっぱいです。旧御聖堂への感謝の思いは、永遠に色褪せることはありません。神に賛美と感謝！



教区 NEWS 教会

旧聖堂のお別れ会

開南教会



去る七月十九日に愛児幼稚園で、開南カトリック教会の旧聖堂のお別れ会がありました。現在愛児幼稚園で体操室として親しまれていたその施設は、一九七九年に現在の聖堂に移るまで、畳の敷き詰められた思い出のあるお御堂でした。私自身園児だった頃、お御堂を訪問した時に、膝立してお祈りしていたのを覚えています。その後卒園した後も、家族で通った主日のミサの雰囲気、初聖体を迎えた時の様子も懐かしく思い出されます。縁あって愛児幼稚園に就職した時には、旧聖堂は子どもたち



（東さよみ）

信徒宣教師として、フィリピン・イースタービレッジに来て、毎日がサマーキャンプみたいです。こっちはなかなかお年寄りに出会いません。とにかく若者ばかりで活気が違います。調べてみたらフィリピンの平均寿命六十六歳ってなっていました。フィリピンの子どもたち、かわ

信徒宣教師便り 首里教会

ちが元気に活動する体操室になっており、一階部分も図書室・保育室として使われ、園児にとつて親しみのある園舎として現在まで活躍しておりました。お別れ会の当日子どもたちは、園長より改めて建物の歴史を聞き、自分たちを育んでくれた園舎に対して感謝の祈りを捧げ、聖マリアの汚れなき御心に捧げられた聖堂にちなんで、アヴェマリアの祈りを唱えながらお別れしました。子どもたちの、ありがとう！さようなら！が心に温かく残る会となりました。（愛児幼稚園 玉城勤子）

訃報

◆愛楽園教会

ヨゼフ 島袋 正雄 様
二〇二三年八月二十五日帰天
享年八十八歳

◆開南教会

マルタ 宮城 直子 様
二〇二三年八月二十八日帰天
享年九十三歳

テレジア 米盛加代子 様
二〇二三年八月三十日帰天
享年五十八歳

パウロ 比嘉 健藏 様
二〇二三年九月四日帰天
享年七十四歳

◆安里教会

アンナ 伊智 玲子 様
二〇二三年九月八日帰天
享年八十一歳

NPO 法人ぶどう園の会



訪問看護ステーションクララ

TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

- ・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)
- ・営業時間 8:30～17:30
- ・営業日 24時間365日(緊急対応含む)



葬祭の「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥堀町4-57-3

TEL&FAX:098-885-8205

http://w1.nirai.ne.jp/yasurai

E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間 受付

24時間 受付

てんごく 098-853-1059

ひが たかしげ (実務担当) 比嘉 高茂



～ご遺族の心をもって奉仕する～ そうてんしゃ

葬 典 社

- *創業30数余年・・・。
- *皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
- *ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。